
犬の姉

ただ書く人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬の姉

【Nコード】

N0646Z

【作者名】

ただ書く人

【あらすじ】

人口の増加により夫婦にふたり以上の子が認められない世界。ふたり目の子は子ではない家族、犬だった。弟を想い、苦しむ姉の選んだ行動は……。

「たんたん」とショートショート」というサイトに掲載済みの作品です

（前書き）

少し性的な描写がありますのでご注意ください。

わたしが生まれてこなければよかったのです。

そうすれば弟は苦しまずに生きることができました。

弟はその苦しみを誰かに伝えることもできません。

確かに人の言葉を解しているのに、人の言葉を話すことはできないのです。

いいえ、話すことを許されていないのです。

しかしわたしには伝わってきます。

十数年家族として生活してきた姉であるわたしには、弟の苦しみが伝わってくるのです。

弟の表情を、弟の目を見るだけで、弟の苦しみが、弟の哀しみが、弟の願いが、わたしの胸に飛び込んでくるのです。

幼少の頃の弟は何度も立ち上がり、何度も言葉を話しました。

その度に父や母は弟を叱りつけ、時には叩いたり食事をやらないこともありました。

やがて弟は自分が人ではないことがわかったようで、人であることを諦めました。

それでも彼はわたしの弟であり、家族なのです。

両親も彼が家族であることは認めていますし、強く愛しています。

しかし両親は彼がわたしの弟であること、自分たちの息子であることは認めていません。

弟は家族であり、ペットなのです。

服を着ることも話すことも許されていません。

弟は生まれた時から犬なのです。

爆発的な人口の増加は出産数の増加ではなく、死亡数の減少のためでした。

百歳を超える老人たちが働きもせず悠然と散歩する姿に、わたしは憎しみを止めることができません。

彼らが死んでしまえば弟は犬ではなく、人として生きられたのです。国は政策を誤りました。

出産数を制限するのではなく、長生きをするばかりの老人たちの寿命を制限するべきだったのです。

老人たちが老人たちのための法を作ったために、弟は犬になってしまったのです。

老人たちだけではなく、わたしは両親にも憎しみを抱いています。ふたり目の子の出産は、その子の誕生と同時に死を意味します。

その両親も罰せられます。

ならばなぜ墮胎しなかったのでしょうか。

なぜ危険な自宅出産をしたのでしょうか。

なぜそうまでして産んだ弟を犬にしまったのでしょうか。

なぜ殺してしまわなかったのでしょうか。

弟を犬にしまったふたりのことです。子が欲しかったのではないはずです。

ふたりの性的な快樂のために、その結果として弟が作られたのです。そして、そのふたりらしい愚かな人道主義や博愛精神と呼ばれるものが、弟を生かして犬にしまったのです。

そこに本当に愛はあるのでしょうか。

疑問に挙げるまでもありません。

もちろん、わたしはわたし自身も憎んでいます。

わたしが生まれなければ、せめて生まれてくる順番が違っていれば、弟は人として生きることができたのですから。

どうしてわたしは生まれてきてしまったのでしょうか。

どうしてわたしは人なのでしょうか。

たった二年違うだけなのです。

それなのにわたしは人で、弟は犬なのです。

わたしは生まれることを拒むべきでした。

わたしがいなければ、わたしは誰も憎まなかった。

かつてのわたしは愚かにも弟が犬であることに疑問はありませんでした。

幼いわたしにとって世界とはこの家がすべてでしたから。

しかし学校に通い、友人たちと交流し、様々な教育を受け、ようやく異常であることに気づいたのです。

それに気づいたとはいえ、わたしには何もできませんでした。

警察に、教師に、友人に、わたしは何度も弟のことを話そうと考えました。

弟のことが世間に知れたらどうなるでしょうか。

両親は逮捕されるでしょう。

あるいはわずかな勾留と罰金で済むことかもしれません。

しかし、まだこどもだったわたしは、両親が逮捕されれば家に帰ってくることはないだろうと考え、それを恐れたのです。

異常であることを理解しながらも、犬である弟と家族として生活し続けることは、わたしにとっても非常に苦しく、哀しいことでした。

いつだったでしょうか、両親が家に友人を招待したことがありました。

わたしは、家に来たその友人の目を忘れることができません。

弟を見た時の、弟を犬と紹介された時の、あの方の目を忘れることができません。

そのあとで見せた曖昧な笑顔を忘れることができません。

その時の弟の哀しみに満ちた目を忘れることができません。

弟の口元を歪めた笑顔を忘れることができません。

わたしは一度だけ弟を殺そうとしたことがあります。

だって弟の願いは死ぬことなのですから。

姉が弟の願いを聞くのは当然のことではないでしょうか。

わたしが弟を殺しても逮捕されることはないでしょう。

両親がそれを警察や他の誰かに訴えることはないはずです。

ただ庭の隅に犬の墓ができ、家族が減るだけのことです。

わたしは弟の首に手をかけ、強く締め付けました。

弟はあの哀しげな目でわたしを見るのみで、抵抗はしませんでした。しかしその目を見てしまったわたしは恐ろしくなって、すぐに手を離しました。

弟は犬ではないのです。

弟は人なのです。

わたしは人を殺そうとしたのです。

弟の願いであっても、例えそれを請われたとしても、わたしにはもう二度とあのような真似はできません。

わたしが手を離すと、弟は仰向けに寝転んで咳き込みながらも先ほどと同じ目でわたしを見つめました。

弟は十四になっていた頃でしょうか。

弟の陰茎は下腹部に貼り付いたように大きく反りかえっていました。まだ息も荒くわたしを見つめ続けていた弟を、わたしは寄り添って抱きしめました。

当時のわたしはまだ高校生でしたが、陰茎の勃起についても性交についても知識だけがありました。

しかし性交をすることはやはりためらわれましたので、わたしは弟の陰茎を手にとって愛撫を始めました。

初めてのことで愛撫の方法などわかりませんでした。横に寄り添ったまましばらくそれをさすっていると弟は突然射精しました。

わたしは急に恥ずかしくなって、弟をそのままにして自分の部屋に逃げ帰りました。

その時からです。弟が見せる表情に、苦しみや哀しみだけでなく、

愛を感じるようになったのは。

それは家族間のもではなく、明らかに男から女に対するそれでした。

わたしの軽率な行為が原因であることは容易に想像がつかしました。わたしも弟を愛していますが、それは姉としてです。

弟がわたしを欲しても、わたしはそれに応えることができないのです。

しかし弟はわたしを前にするといつも勃起した陰茎を見せつけ、わたしはその度に弟のそれを愛撫しました。

後ろめたい罪悪感や背徳感を抱きつつ、時には口すらも使ってわたしは何度も弟を射精させました。

それは現在まで続いています。

両親はわたしたちの行為に気づいているようですが、何も言いません。

自分の娘と息子が、人と犬がこのような行為をしているなど、とても許すべきことではないはずですが、父も母もわたしや弟を叱りもせず、普段通りに接してきます。

弟を犬にしてしまった張本人である両親も、弟を哀れに思ったり申し訳なく思ったりするのでしょうか。

そのために見て見ぬ振りをするのでしょうか。

だとしたらわたしが殺すべきなのは両親なのかもしれません。

弟の願いでも、他の誰に請われたのでもありませんが、わたし自身の憎しみのためにわたしは両親を殺してしまいたい。

わたしがこの家を逃げ出そうと考えたのも当然のことでしょう。

進学のためにわたしはこの家を出ることになりました。

離れた地方の大学ばかり受験したわたしに、両親は何も言いませんでした。

わたしは二度と戻ってくるつもりはありませんし、彼らもそれがわかっていてのだと思います。

弟には直接話していませんが、わたしが家を出ることはわかつてい
ることでしょう。

弟を捨て、弟から逃げてしまうことは心苦しく思いますが、わたし
はこの時をずっと待っていたのです。

哀れみ殺してやりたい弟を殺すこともできず、憎しみ殺してやりた
い両親を殺すこともできず、耐えてきたのです。

自分自身でも逃げることは卑怯な行為であるとわかっています。

しかし、悲劇の少女を演じるつもりはありませんが、誰がわたしを
責めるといのでしょうか。

それができるのはただひとり、わたしだけです。

そしてわたしはわたしを責め続けて一生を過ごすことでしょう。

最期にせめてもの謝罪として弟と性交をしてやろうかとも考えまし
たが、それは思い直しました。

それは性的な快楽をわたし自身も味わうことになるのでしょうか。

そうすることで、無責任にも弟を産んだ両親とわたしが同じ存在に
なってしまうように感じられたのです。

もちろん恋もしたかった。

わたしは処女のままで、恋する男性と、できれば将来ともに生きて
いくことになる男性と出会いたい。

弟のことは永遠に愛し続けます。

どんなことがあっても弟は弟なのですから。

最期に会った弟の目は、やはり大きな哀しみと絶望を訴えていまし
たが、わたしはもう迷うことはありません。

わたしは弟を殺します。

わたしは家を出て弟を殺します。

わたしが出ていった家で弟は自死をするでしょう。

犬は自死をしません。

弟は人としてわたしに殺されるのです。
姉であるわたしにはそれがわかるのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0646z/>

犬の姉

2011年12月2日15時53分発行